

# 青少年ゆずめ

青少年育成湯沢市民会議 令和6年3月1日発行

## 令和5年度 青少年育成湯沢市民大会

11月17日(金)雄勝中学校体育館において、湯沢市教育委員会共催、湯沢秋田ライオンズクラブ、雄勝小野小町ライオンズクラブ、稲川ライオンズクラブの協賛により、令和5年度青少年育成湯沢市民大会が開催されました。

今回は、4年ぶりに一般の皆様にも参加いただき、会場となった雄勝中学校の生徒をはじめ多くの参加者へ向けて、湯沢市雄勝郡の各中学校の生徒9名が、力強く意見を発表しました。今号ではその発表内容をご紹介します。



## 意見発表



ナイフを向けず、  
花束を

湯沢北中学校 3年  
藤原 優菜

人生において、誰かに褒められたり誰かを褒めたりする時間って、この上ない幸せを感じる瞬間だと私は思います。たとえお世辞だとしても、社交辞令だとしても、褒めるきっかけがないと褒め言葉は生まれません。どんな褒め言葉も、自分にはなくて心が惹かれるほどの魅力があるからこそ生まれてくるもの。だから、これまで誰かがくれた褒め言葉は墓場まで持っていくつもりで、心の中で大切に保管しておく。それくらいに大きな価値が秘められているのです。

でもそんな褒め言葉とは裏腹に、誹謗中傷や日常生活にひそむ陰口や相手をけなすような言葉も、社会には存在していることを忘れてはいけません。SNS上で飛び交うそれらの言葉は、関係のない私たちの心まで傷つけてしまいます。

その中でも私が気になっているのは、高齢者や障がい者に向けた軽蔑的な目や偏見です。私は将来、医療・福祉関係の仕事に就いて、直接人の役に立ちたいと考えています。これは、今まで誰にも伝えたことはありません。このような職種に就くには相当な努力が必要で、私には難しいことも分かっています。でも、どうしても目指す理由が

あるのです。

私のひいおばあちゃん、私が小学4年生のときに86歳で亡くなりました。他の病気にもなっていたかもしれない。ひいおばあちゃん、息子と二人暮らしで、息子は仕事で夕方まで帰ってこないため、日中はひいおばあちゃんが1人でした。だから、私の祖母と母は毎日のようにひいおばあちゃんの家に行き、介護をしていました。自分たちの身を削ってまで忙しく行っている姿を見て、私にも何かできないかなと思っていました。当時の私には何もできませんでした。

確かに介護や看護は大変です。そばで見ただけの私にも、その苦労は伝わってきました。自分の身内の介護ですらそうなのに、ましてや他人に対してだと、さらに苦労が増すでしょう。例えば、私がお見舞いに行ったとき、いつものようにこしていたひいおばあちゃんとは違って、無表情で、私たちが話しかけても反応がなかったことがありました。意思疎通ができないのは、周りの人たちにとって苦しいことです。その人のことをよく知っている人なら、「前は優しかったのになあ」と思うことができないかもしれません。知らない人であれば、自分の介護の仕方を否定されているような気がして、辛くなるかもしれません。

私たちの今の生活は、高齢者の方たちが若い頃にさまざまな経験をしながらよりよい社会を作り上げてくれたから、成り立っている。私は考えます。でも、今の社会の状況では、一輪一輪咲いた花を凶器で切り裂いているのと同じです。社会全体に、寛容さ、あるがままを受け入れる心の余裕がないよ

うに思うのです。繰り返されるSNS上でのトラブルや、言葉による暴力、悲しい出来事。相手を傷つけることで自分が優位に立つたと感じたとしてもそれは間違いです。私は、相手を笑顔にできる人が、一番強いと思います。

ひいおばあちゃんが亡くなる直前、私がお飯を食べさせたとき、ほほえんでくれたように見えました。私はそのとき「将来、人の笑顔を守れるような命を救えるような人になる」ことを決意しました。そして、私はたくさんの人たちに言葉のナイフを向けず、褒め言葉、そう、花束を渡すような人間になりたいと思ったのです。そのためには、相手のことをよく知り、よく関わる部分が大切です。その人に惹かれる部分を探し出し、花束を渡すきっかけを見つける、私の毎日がそんな楽しいことにあふれていくように願っています。



主張する人々の  
大切さ  
雄勝中学校 3年  
兼子 莉奈

皆さんは、日常生活の中で自分の意見を主張することができているでしょうか。

自分の意見を主張する機会は、毎日の生活の中にたくさんあります。友達同士の会話、授業中、学級での決め事など。そんな時に、自分の考えに自信がないから、自分の考えを言わない、あるいは言えない人も多いのではないのでしょうか。

私も、自分の意見を言えなかったという経験はたくさんあります。小学生

の頃、算数の授業で問題の解き方を考えるという授業がありました。私は自分なりの考えをもっていました。周囲に否定されたらどうしよう、「周りに否定されたらどうしよう」という不安が頭をよぎり、発表できませんでした。その時に、担任の先生が「あなたのアイデアはとても素敵なものばかりだよ。」という言葉掛けてくれたので、私は、自分の考えを認めてもらえて、とても嬉しくなりました。同時に、自分の考えに自信がもてるようになりました。

「自信をもてるようになった」というのも、まだ不完全な部分もあります。それは、多数派の意見に流れやすいということとです。違うのではないかと、思っても、多数派の意見に対して反論することは勇気がいることです。

たとえば、授業で自分の考えとは違う考えに賛成意見が多く寄せられた時、それに対して私は、ただ合わせることはできませんでした。「頑張つて考えたのに」と自分の行動を顧みて、悲しくなりました。

では、なぜ、自分の考えを伝えることが、大事なのでしょうか。

自分の考えを言わないと、周りの考えに流されやすくなります。人の心の中は見えませんが、言葉や文字にしなければ、周囲の人に伝わることはありません。結果はどうあれ、人に任せずに自分が選択することが大事なのです。声を上げなければ賛成と取られて終わってしまいます。そのようにして決まることが、うまくいかなかったら、納得のいかない結果になったら、自分の考えを伝えなかったことを後悔するでしょう。もし伝えていたら、結果は違ったかもしれないのです。

また、意見が多様になればなるほど、活動はよりよいものになります。それぞれが考えて出した意見ならば、全て尊重されるべきです。そのような姿勢を、私たち一人一人がもたなくてはならないと思います。聞く側は、発言者の声に耳を傾け、親身になって聴くべきだと思えます。そうすれば、自分の意見を言うことへの不安も、なくなっていくと思います。

意見を言うことで、聞いた側としても選択肢が増えます。もしその意見が取り入れられれば、言った側は嬉しくなる、また、自分が何を考えているのかを周りに知ってもらえます。このように、意見を伝えることは、多くのメリットを生むのです。

もう少し広い視野で考えてみると、自分の意見をもつことや発信することは、結果的に将来の自分を守ることももつながると思います。

インターネット上では現在の政治について苦言を呈する内容をよく見ます。「私たちの生活がよくなる」という現状は、有権者が政治に無関心であったり、投票に行かず、自分の考えや意思を発信してこなかったことも原因の一つではないでしょうか。選挙に行かずに、政治家任せにしていたことが、今になって「私たちの生活がよくなる」という形で返ってきているのではないのでしょうか。そう考えると、自分の考えをもち、それを表明すること、私たちが自身を守ることにもつながら、私たちが思っています。

このように、自分の意見を持ち、それを発信することによって、得られることはたくさんあります。

自分のためにも、周りのためにも、意見を主張することが大切なのです。



心と向き合う  
東成瀬中学校 3年  
谷藤 優妃

みなさんには「友達」が何人いますか？数人？数十人？中には100人単位、という人もいるかもしれません。スマホの普及によって、私たちはたくさんの人と知り合うことができるようになりました。実際私たちが中学生も自分が通う学校以外の中学生との交流をもっています。そのきっかけは部活動の交流であったり、友達からの紹介であったりと、実に様々です。だから私たちのスマホには、たくさんのメルアドレスが登録されています。

ところがスマホを利用して人の中には、このメールアドレスの登録数を、自分の「価値」として捉えている人がいるようです。登録者数が多ければ多いほど、自分は周囲の人に認められている、人気者であると捉え、そこから自分の存在にステータスを感じるというものです。

確かに大勢の人との関わりをもてる人は、コミュニケーション能力があると私は思います。またそうしたスキルをもっている人は、輝いて見えます。いつもたくさんの友達に囲まれて楽しそうにしている人は、中学校生活が充実しているように感じられます。

また逆に登録数が少ないと、自分は暗い性格なのだろうか、という不安をもつ人もいます。そうすると、自分も友達がいらない「ぼっち」として周囲の人にみられているのではないかと、という不安も生まれます。さらにそうした「不安」は、その人の行動にも影響を

与えるように思います。自分への自信のなさからか、学校生活で消極的な姿勢になっていくからです。

ですが、スマホに表示されている登録数は本当に自分の価値を表すものなのでしょうか。

私は違うと思います。

「友達」の定義づけは色々ありますが、私が考える「友達」とは、相手も自分もお互いを理解している人のことだと思っています。だから自分が相手を「友達」と思っている、相手がそう捉えていないと、両者の間に「友達」という関係性は成り立たないと私は思うのです。そうした場合は、「友達」ではなく、単なる「知り合い」だと思うのです。このような理由から、ただ単純にメールアドレスの登録数で自分の価値に結び付けることに、私は疑問を感じるのです。

思春期に入り、中学生の私たちは心が不安定になりがちです。私たちが友達と一緒にいたいと思うのは、そうした不安を打ち消すために、支え合おうとする心理が働くからだと思います。だから無意識のうちに私たち中学生は、たくさんの人との出会いを求めるのかもしれませんが。

私はそうした交流を否定しません。それというのも、たくさんの人との出会いによって、色々なことを学べるチャンスが訪れるからです。しかしその際、しっかりと自分の「考え」を持つていないといけないと思います。その「考え」とは、「自分は自分。他人は他人」という意識をもつことです。自分の人生の主演は自分です。自分の意思をもって自分の未来に向かっていくことが、充実した生き方につながる、と言えるのではないのでしょうか。

だからこそ、自分の考えをしつかりともって行動していくべきだと私は思うのです。

しかし、我を通していくべきものでもないとは私は思います。自分の判断力を形成するためには、勉強はもちろん色々な経験を踏まえていく必要があるからです。そのため、私たちは日常から自分の心と向き合う意識をもつことが大切だと私は思います。

自分の心と向き合う―それは他人に流されない自分の心に「芯」をもつことです。だからみなさんも自分の心と向き合ってみませんか。自分の心に向き合えた時、明るい未来への道がきつと見えてくるはずですよ。



湯沢南中学校 3年  
永井 海音

可能性を信じて

皆さん。皆さんは今晚の夕ご飯に、何が出たらうれしいですか。焼肉？寿司？ラーメンもいい？どれも本当においしいですよ。でも僕だったら天ぷら。夕飯に祖母が作ってくれる天ぷらが出たら、本当にうれしいです。僕の祖母の天ぷらは、カラッと揚がっていてサクサク。もう、何杯でもご飯が食べられるって感じです。

です。

そば屋は今から10年ほど前に閉店しました。街の人口がどんどん減って、商店街を訪れる人が少なくなりました。またたからです。うち以外にも閉店する個人商店が相次ぎ、賑やかだった商店街は、今、シャッター通りになってしまいました。湯沢市だけではありません。今や秋田県全体が、人口減少に苦しむようになりました。

僕は自分のふるさとが、明るい希望のあるところであってほしいと願っています。皆さんも同じ気持ちだと思います。秋田県は日本の中で、人口減少第1位の県だそうです。高齢化も。僕たちがどんなにがんばっても、輝きを取り戻すことは不可能に思えてしまいます。でも、本当にそうでしょうか。

僕たちの学校は今年、東京に修学旅行に行きました。初めて見る東京は、大きなビルがそびえ立ち、人がたくさんいて、華やかな雰囲気。満ちあふれていました。でも風が吹いてくると、何か変な匂いがしてくるのです。人もあまりに多いと、うんざりしてきます。僕は自分のふるさとに吹き渡る、草や花の匂いがするそよ風が恋しくなりました。そして3日後、修学旅行から帰った僕たちを待っていてくれたのは、広々とした田んぼを吹き抜けてくる爽やかな風と、満天の星空でした。もしかしたらこの時、僕は初めて、自分のふるさとよきに気付いたのかもしれない。これまで聞き逃していた、地元野菜や果物がどんなにおいしいのかというニュースや、新しく始められようとしている地熱発電や風力発電のニュースなどが、耳に入ってくるようになってきました。そして、自分のふる

さとが、大きな可能性をもっていることになりました。

短期間遊びに行くのであれば、都会はとて刺激的で、楽しいところですが、しかしそこで長く暮らすとなると、どうでしょうか。落ち着いて、ゆつくりした気持ちで過ごせる田舎暮らしも悪くないな、とは思いませんか。

皆さんはそれぞれに、将来の夢があると思います。その夢は、ふるさとに住んでいては絶対にかねることのできない夢でしょうか。僕の夢は、医者になることです。地域医療に従事する医者になりたいです。僕は、僕の祖母のような高齢者や、地域に十分な医療機関がない人たちの役に立つ、そんな人生を送ってみたいと考えています。もちろんそのためには、今から一生懸命勉強をしなければなりません。厳しい道だということは、分かっています。でも僕は自分の可能性を信じて、この道をわき目も振らず、歩いていくつもりです。

僕は、僕たちが自分のふるさとの可能性を信じ、そこに住むことを将来の選択肢の一つに入れることで、少しずつでもふるさとを元気にすることができ、そう考えています。樂觀的過ぎるでしょうか。でも僕たちがふるさとで生きることが、例えば商店が増える、いくでしょうし、それに伴って、仕事を増やす場所も増えていくはずですよ。ふるさとを元気にするために僕たちができること、それは本当はたくさんあるはずです。自分に何ができるか。自分の可能性を信じ、そしてふるさとの可能性を信じ、これからの自分の生き方を考えることは、価値のあることだと僕は信じています。



自分らしく生きる

山田中学校 3年

藤原 茉央

「女のくせに、男のくせに」

みなさんは、この言葉を聞くとどう思いますか。私はその言葉を耳にする心のどこかで否定している自分がいます。そんな自分がいると気付いたきつかけは、ある一つのテレビ番組でした。

ある日、テレビを点けると、ジェンダーレスについて取材している番組がありました。「LGBTQ」のことについての特集で、その内容は、自分の知らないことばかりでした。

例えば、同性の人を好きになつたことにより、変な印象を周りからもたれ差別を受けてしまうことがあるということです。そんな差別を受けてしまうと、ありのままの自分として生きることはできず、周りの意見に流されて生きるようになってしまふと思います。そんな世の中になつてしまふのは嫌だと感じました。そして、もつと「LGBTQ」について知らなければならぬと私は思いました。

みなさんに質問です。「LGBTQ」についてどのくらい知っていますか。調べてみると「LGBTQ」については約9割の人が知っているといることが分かりました。しかし、社会的マイノリティ、つまり、社会参加が制約されたり、偏見や差別が障害となつて生きづらさを感じたりしている人が約8割いることも分かりました。つまり、「LGBTQ」について認識はしている、差別や偏見が生まれているとい

うことなのです。

では、このような矛盾をなくすためにはどうすればよいのでしょうか。この矛盾を少しでも減らすために必要になつてくることは、日本の社会的ルールを少しでも変えていくことだと私は考えました。実際には「LGBT平等法」という法律があります。世界でも約80カ国以上の国々で制定されています。日本では法律は制定されておらず、「LGBT理解増進法」という努力義務が、今年6月に整備されたということも分かりました。もし日本にその法律があつたら、差別や偏見が減っていくことになると思います。日本が努力義務で止まつていることが、差別が起こつている原因の一つだと思

私は、今回「LGBTQ」についてたくさん知ることができたとし、現在の日本におけるジェンダーレスの問題や課題について知ることができました。そして今回は、特に男女差別について調べ意見を述べましたが、世界では他にも、人種差別や年齢、文化の面で差別を受けている人がいるのです。

今この世界から、少しでも差別を減らすため、私たちができることは何なのでしょう。私が考えたことは、さまざまな視点からの意見を聞き、理解し、互いを認め合いながら生きることだと思ひます。差別で苦しんでいる人の意見を聞くことが第一だと思ひますが、それだけでは、現状は変わらないと思ひます。

差別をなくすためには、他の立場の人の意見を聞き、いろいろな人のために周りが変わり続け、変わり続ける人も生きやすいと思ひないと、また差別が起こつてしまふと思ひます。

互いのよさを認め合う心を、一人一人もつことが大事だと思ひます。何事にも否定から入ることなく、意見を出し合うことが大事なのです。日常の小さなことから意識するだけでいいのです。誰もが、自分を自分で認められる世界へ。そして、どんな人もありのままの自分で、自分らしく生きていける世界を創り上げないといけないのです。

「女のくせに、男のくせに」この言葉の代わりにこう言いませんか。「あなたらしく、自分らしく」私は、そんな世界にしていきたいのです。



常識を超えて

稲川中学校 3年

佐藤 悠和

さあ、皆さん。心の中で呟いてみましょう。「みんなちがって、みんな……。」

今、心の奥底から、本当にそうだなと思つて「いい」と言葉にできた人が、どれほどいるでしょうか。

今の世の中は、周りと同じように、足並みをそろえて生きることが一つの常識になつていると私は考えます。自分も周りも成長すればするほど、周りと違うこと、それは恥ずかしいこと、間違つたことであるかのような雰囲気を感じることが多くなりました。

「なんでそんな考えになるのか分からない。」

ある日の授業中、友達からそう言われたことがあります。友達と意見交換をする場面での出来事でした。その

一言を聞いた途端、私は固まつてしまいました。きつと、いや絶対に、友達はこの言葉を頭から離れず、次第にこの言葉が恐怖心へ変わつていきました。それからの私は、自分の思いを上手く伝えられなくなりました。友達と意見交換をする場面、友達とのたわいのない会話、いつでも、どこでも、相手の考えを先に聞いて、それに同調する相手に、「悠和と私は考えが違ふんだ」と思われぬように……。一つ我慢すれば、この子と友達でいられる。私が相手に合わせればいいんだ。そう自分に言い聞かせて、私はウソの自分で生活してきました。

そして、ふと、これまでの学校生活を振り返れば、個性や自分らしきよりも同調することを求められることの方がずっと多かつたように感じます。多数決で物事を決めるとなれば、なんとなく周りの手の挙げ具合が気になる。自分は用事がないけれど、なんとなく一緒にお手洗ひに行く。私の心も体も、「同調の常識」によつて動かされてきました。

自分の本音を正直に言うことや、「自分は用事がないから行かない」と意思表示することが個性ではないかもしれませんが、何でも「私、私」となつてしまえば、それは単なるわがままになつてしまひます。しかし、自分で自分の思いや考えを尊重することができないこのむなしさ。私つて何なのだろう。

「同調の常識」があれば、言葉で説明をしなくても通じ合える便利さや周囲との一体感を得られることがありません。生い立ちも性格も異なる人々が、よりよい人間関係を築けているのは、間違いなく「同調の常識」があるお

げです。社会に無数にある常識を身につけていく意味は、確かにあるはず

しかし、常識だからといって流されるがまま過ごす中で私たちが失ったものは、「自分」なのではないでしょうか。思う存分考えて、行動して、私は私として生きていくのでしょうか。

私も、皆さんも、一度「同調の常識」の電車から降りてみませんか。常識というレールの行き先が、本当にいいのか、今、必要なかを考え直してみませんか。あなたと同じ行動や決断をしなかつたからといって、私はあなたを嫌っているわけじゃない。私があなたを大切にするように、私も私を大切にしたい。だからあなたもあなたの考えを大切にしたい。自分の目の前にいる相手が、きつとそう思っていると思えば、ほんの少し、「同調の常識」の苦しみが無くなるのではないのでしょうか。こうして「同調の常識」の電車から降りてみれば、あなたはあなたで、私は私で、自分らしく生きていけるかもしれません。

「みんなちがって、みんないい」  
私も、あなたも、今度こそ自信をもって、そう言えますように。



「多様性」に縛られるな  
皆瀬中学校 3年  
阿部 寧々花

皆さんは、私の格好を見てどう思いますか。私は冬期間、ストラックスを履いて生活をしています。これはいわゆる

「男らしい」格好が好きだから、というわけではありません。現に夏の期間は、スカート履いています。しかし私がストラックスを履いていることで、不本意に配慮されることがあります。急速に多様性への理解が進んでいる中、思想や好みはそれぞれで違って当然であるがゆえに、多様性をもつと理解しなければならぬ、配慮しなければならぬという思いに、皆さんは縛られていますか。

私は中学校に入学するとき、冬期間の制服として、ストラックスを選択しました。私の住む秋田県湯沢市は、豪雪地帯です。寒がりな私は、急激な気温の低下に耐えるために、ストラックスを選びました。しかし実際にその制服で登校すると、「男らしいものが好きなのか。」「男性らしく振舞いたいのか。」といった誤解を受け、気を遣って声をかけられたことがあります。きつと私の姿に配慮して、善意から声をかけてくれたのでしょうか。ですが私は、「そんなつもりで選んでいないんだけど。」と思い、多様性の中に不本意にカテゴライズされたように感じました。

2019年、OECDが行った「OECD諸国の性的マイノリティに関する法整備ランキング」では、日本は35カ国中、34位と、ワースト2位です。そのような背景もあり、国による法整備や企業での取組が急速に行われています。また、著名人が自分の性認知を公にするような発言も増えました。そのことよって、生きやすさを感じた人々がたくさんいると思います。一方で、日常生活で、多様性への理解へそこまで悩んでいなかった私のように、少しの変化が過敏に捉えられてしまいかえって生きづらくなってしまう人

もいるのではないかと思います。多様性への理解というものは、「あの人はこういう物が好きなんだ。」「こういう好みがあるんだ。」ということだと思います。男性でもパンケーキを食べたいときがあると思うし、女性でもロボットアニメが好きなのはいます。「男らしい・女性らしい」と好みをカテゴライズして過敏に反応してしまいうことが、多様性への理解を遅らせている一つの理由なのではないかと考え

ます。相手を本当に理解するには、固定観念から脱却して、ありのままに相手の好みを受け入れることが大切だと思います。先入観を捨て、対話し、相手と思いを通わせることで、相手の人物像が見えてきます。それが、多様性への第一歩ではないでしょうか。多様性という枠に縛られず、自由な広い心で相手を受け入れ、自分と同じ好みと一緒に楽しみ、違う好みであったらその魅力を教えてもらおう、このような関係ができたなら素敵だと思いませんか。私はこの関係性を築くことが、本当の多様性につながると思います。

性別に限らず、人種や文化、身体的な特徴など様々なことについて多様性を理解し、配慮しなければならぬ世の中になつていきます。今までの固定観念から脱却することは難しく、今まさに、脱却しようとしている最中だと思います。理解しなければならぬ、配慮しなければならぬという思いに縛られて、窮屈に感じている人も少なくないでしょう。だからこそ私は、「多様性に縛られるな」と言いたいのです。みんなが好きな物を好きと言え社会になることを願って、私は、「ストラックスを履いているのは寒がりだから、髪を短くしているのは、長くすると手

入れが面倒だから。好きな色がピンクなのは、かわいいから。」と、堂々と言いたいです。



助けて！  
湯沢南中学校 3年  
宮原 莉子

「助けて！誰か僕を助けて！」  
どんなに叫んでも願っても、彼を助ける人は、誰も現れませんでした。

みなさんは夏休みの最初の頃、幼い男の子が、自分のおじさんやおばさん実のお母さんに、背中を鉄の棒で殴られたり、足で踏みつけられたりして殺された、というニュースが流れたのを、覚えていますか。男の子はまだ、たったの5歳でした。自分を大切に守ってくれたはずの人たちに、殴られたり蹴飛ばされたらしてるとき、この子は何を思っていたのか。そう考えると、私は心がぎゅつと締め付けられるような気がします。そして、きつと、大声で泣いたり助けを求めたりしたはずなのに、どうして誰も彼を助けてあげることができなかったのかと、とても残念な気持ちになるのです。

同じような事件がたくさんあるので、私たちは「ああ、またか・・・。」と思ひ、そして忘れてしまいます。「優しい」ということがこんなにももてはやされ、しかも世界でも指折りの、安全で、便利で、豊かな国に住んでいるはずなのに、虐待されて死んでしまう子供や、貧困で満足にご飯も食べることができない子供のニュースが、毎日のように流れる。人々は、そんな事件

や貧しい子供のことなんて、自分とは無関係だと思っている。あなたも。あなたも。あなたも。そして私も...

でも例えば、私たちは自分の家に、生活していくお金があるのが当たり前だと思つていますが、何かの事情でお金を稼ぐことができなくなつてしまつたら、どうなるでしょうか。そんなことは絶対に起こらないと、あなたは言

い切ることができませんか。私には言い切る自信がありません。誰もが当事者になる可能性があるのです。それが虐待や貧困、そしていじめの問題です。私たちは自分事として、これらのことを考えなければならぬと思います。

「助けて!」と声を上げるのは、実はとても難しいことです。他の人に知られるのは、恥かしい、という気持ち。正直に話すのは、怖い、という気持ち。それを乗り越えなければ、助けを求められないからです。だからこそ、「助けて!」という声や気配を感じたなら、私たちはためらわずに、手を差し伸べなければなりません。そんなこと無理ですか。中学生だからですか。そんなことはないと思います。私たち中学生にだってできることは、たくさんあるはずですよ。自分一人では無理だと思ふなら、例えば友達に話してみる。親や先生など、信頼できる大人に相談してみる。本当に緊急だと思つたら、110番したつていいと思ひます。あなたが真剣だということが分かつたら、みんな、必ず手を貸してくれるはずですよ。

本当に助けを必要としているなら「助けて!」という声を上げる。「助けて!」を聞いたら、ためらわず、自分のできることをしてあげる。とてもシ

ンプルですが、難しいことです。でも私はそういうことが普通にできる人間になりたいと思つています。そんな人間が増えることで、この国は、本当の意味で優しく、豊かで、安全な場所になつていくと、信じているからです。



違和感の正体  
羽後中学校 3年  
佐藤 琴紗

今、あなたの目の前を、通学途中の女子生徒が歩いていきます。彼女は制服姿ですが、ボトムスはストラックスです。あなたはこの様子を想像して「違和感」を感じたでしょうか。女子のストラックス姿が目新しいと思つても、「違和感」を感じる人はほとんどいないのではないのでしょうか。では逆に、「スカート

を履いた男子生徒」を思い浮かべてみてください。すぐに想像できたでしょうか。そしてそこに、「違和感」を感じはしなかったでしょうか。ストラックス姿の女子生徒を思い浮かべるのは何ともないのに、スカート姿の男子生徒を想像すると「違和感」がある。そもそも、この「違和感」とは何でしょうか。たくさんの学校で、女子生徒のストラックスの選択制が導入され始めました。この制服を選んで着用する女子生徒を見ても「違和感」を感じないのは、我々は普段の生活の中で、ストラックス姿の女性を見かける機会が多くあるからだと思います。私も私服では、ジャージやジーンズなどを好んでよく履いています。しかし、スカートを履いている男性を見かけたことがある人は、ほ

んどいないのではないのでしょうか。実際、私もありません。私たちは、自分にとつて見慣れないもの、自分が常識だと思つていることから外れたものは全て、変なもの、おかしなことと決めてしまいがちです。見知らぬ人、見たことのないものを警戒し、「おかしなやつ」「変な人」というレッテルを貼つてしまふ。その人がどんな考えをもつていいのか、これまでにどんな生き方をしてきたかについて思いを巡らすこともせず、「スカートを履いた男」と見るや、「気持ち悪いやつ」「変人」などという呼び方で、無意識のうちに偏つた差別的な棲み分けをしてしまつていふような気がしてなりません。

また、偏見や差別化というのは、必ずしも性別や見た目だけに限らないように思います。家庭環境、経済状況、成績の良し悪しなど、ありとあらゆるカテゴリーにおいて、無意識のうちに差別化してしまつていふ気がします。もちろん、私も含めて。

例えば、私には東京へ頻繁に遊びに行つたり、ライブを観に行つたりする友人がいます。私からするとその友人は、「お金や時間に余裕がある人」です。一方、私にはそのような余裕はありません。私は東京へは、修学旅行で初めて行きましたし、それ以外の地域には行つたこともありません。かといつて、私が自分の家庭に生まれたことを不満に思つたことは、一度もありません。

しかし、自分ではどうすることもできない家庭環境や性別の問題に悩む人は、大勢います。彼らがそれぞれの人生で、他人から理不尽に責められたり、差別されたりする理由は、どこにもあ

りません。それなのに「あの人は片親だから嫉がなつていない」「あの人は同性愛者だから、自分たちを狙つていない」など、偏見や一方的な決め付けともいえる考えに支配され、攻撃的になる人たちが、この世の中には、まだまだたくさんいるのです。

自分では何も考えることなく、お仕着せの「常識」という名に縛られていふ今の世の中。これを一気に変えるのは難しいことかもしれない。しかし、まずは変革の第一歩として、「自分にとつて見慣れないことや、初めて出会うものはおかしなものに違いない」という色眼鏡を外し、「互いを理解し合う姿勢をとることが必要なのではないでしょうか。そうすることで、自分が感じていた「違和感」の正体が何であるかに気付き、そのとき初めて、相手の存在を受け入れ、認め合おうとする社会の扉が開くと私は考えます。「違和感」の正体を知ることこそ、これからの社会を担う私たちに求められる姿だと、私は考えています。

青少年ゆざわ編集委員会

◆事務局  
湯沢市佐竹町1番1号  
湯沢市教育委員会事務局  
教育部 生涯学習課  
TEL 73-12163

委員長 柿崎 清  
副委員長 高橋 政介  
委員 高嶋江美子  
委員 草薨 芳哉